

令和8年度 港湾政策研究所講演会 in 横須賀の開催報告

第99回(公社)日本港湾協会定時総会翌日の令和8年5月28日(木)、神奈川県横須賀市の横須賀芸術劇場ヨコスカ・ベイサイド・ポケットにおいて、令和8年度 港湾政策研究所講演会in 横須賀を開催しました。今回は「海洋都市横須賀の原点と未来」というテーマで、2人の講師をお招き講演会を行いました。

初めに歴史&山城ナビゲーターの山城ガールむつみ氏から「横須賀と三浦一族～歴史を駆け抜けた名族～」と題し、ご講演いただきました。

三浦一族は平安時代末期に三浦郡(現在の三浦半島)を拠点とした武士団であり、武功により三浦郡を恩賞として受けて三浦氏を名乗りました。衣笠城を本拠とし、周辺に分家が領地を持って地名を名字とした結果、現在も三浦半島各地に三浦一族ゆかりの地名が残っています。特に源頼朝の挙兵の際には、三浦一族は計画段階から参画し、最も近くで支援し、源頼朝と共に鎌倉入りを果たしました。



山城ガールむつみ氏

その後、北は青森から南は九州の長崎・鹿児島まで全国各地に領地を持ち、今でも各地にその末裔が存在しています。特に港を拠点として発展した海の一族でした。

三浦一族は、鎌倉時代に本家が滅亡したものの、分家が継承して戦国時代まで続き、500年近くにわたり三浦半島を統治した名族でした。

さらに現在の三浦半島のマリーナと三浦一族の城との関係について説明され、油壺、葉山、浦賀、逗子、佐島のマリーナがすべて三浦一族の城とセットになっており、現在のマリーナの場所が中世から船着場として使われていたとのことでした。また、浦賀では、戦国時代から鍛冶集団が造船を行っていたようで、幕末近代の浦賀ドックの歴史へと繋がっているとのことでした。

また、三浦一族の本拠地である衣笠城と水運との関係について詳しく説明され、現在は内陸にある衣笠城ですが、江戸時代の干拓以前は久里浜湾から入江が入り込んでおり、船でアクセス可能であり、縄文時代の貝塚が2か所あることから、古くから人の営みがあった場所に三浦一族が本拠を定めたことと述べられました。

「中世のみならず、江戸時代そして現在においても語り継がれる名族三浦一族。おそらく全国でこれだけ長きにわたり、その土地を統治した一族、そして伝説になった一族はいません。結びとして、この三浦一族という名族をぜひ横須賀にお越しになったきっかけに知っていただき、横須賀を彩る一つとして興味を持っていただければ幸いです」という言葉で講演を締めくくられました。

続いて国立研究開発法人海洋研究開発機構(JAMSTEC)の赤根英介氏より「海水の向こう側へ～日本初の砕氷研究船の建造と運用準備～」と題し、日本初の砕氷研究船「みらいⅡ」の建造と運用準備についてご講演いただきました。



赤根英介氏

まず、建造に至る経緯を説明されました。地球温暖化による北極海の海水減少の影響で偏西風が蛇行し、寒気が下りてくることで日本に豪雪や寒波をもたらすという現象がありますが、観測データの不足により発生のメカニズムが解明されていないので、北極海に行きつらした観測データを確保する必要があります。また、北極海が航路として活用される動きが活発化していることや、将来的に北極海が漁場になる可能性もあることから、科学的知見をもって日本が世界に貢献していくこと、そして国際的な枠組みやルール形成に科学的知見をもって参画するため、国際的な研究プラットフォームとして利用可能な、十分な砕氷機能と世界レベルの観測機能を備える「みらいⅡ」の建造が決定されました。

「みらいⅡ」の代表的な観測機器として、世界でも3隻にしか搭載されていないドップラー気象観測レーダー、世界でもユニークな観測機器として水深300メートルまで潜航可能で、氷を壊さずに氷の下環境や生物を観測できる自律型無人探査機があります。

また、マンライディングバスケットによる氷上作業や電磁誘導法による氷厚観測など、砕氷研究船ならではの観測機能についても説明されました。

さらに、今月撮影したばかりの最新画像を使って船内を詳しく紹介していただき、船としてほぼ完成に近い状態であることを示されました。

就航後は日本近海での各種機器の運用訓練、次に熱帯域での採水訓練、そして冬季のオホーツク海の流水域での砕氷航行、さらに来年度にはベーリング海での本格的なアイトライアルも計画していると述べられました。

最後に、将来的な構想として北極海縦断観測について説明されました。北極点まで到達し、大西洋側まで抜ける、あるいはアラスカ・カナダ側からグリーンランドを抜けてアイスランドまで到達するような観測航海を実現したいとのことでした。これは国際連携により他国の砕氷船と協力しながら実施したい構想であるとも説明し、北極調査隊というキャラクターを使った小中学生向けコンテンツもYouTubeで公開していることを紹介し、講演を締めくくられました。

当日は、多くの参加者が熱心に聴講され、講演後の質問時間では、複数の参加者から質問が寄せられ、関心の高さがうかがわれました。

日本港湾協会では、公益事業の一環として毎年、定時総会に合わせて港湾政策研究所講演会を行っています。今後とも開催地の特色を取り込んだテーマで講演会を行ってまいります。